『kinezo#2』キネマ旬報 臨時増刊号、2006年6月

『ダ・ヴィンチ・コード』ベストセラーの背景

～なぜ本作がこうも論議を呼んだのか～

小原克博=文
text by Katsuhiro Kobara

『ダ・ヴィンチ・コード』騒動から見える世界

推理小説『ダ・ヴィンチ・コード』は03年(邦訳は04年)に発刊されて以来、世界中でベストセラーとして注目されると同時に、多くの批判を受け、論争の的となった。こうした論争の一端は日本のメディアでも伝えられてきたが、おそらく多くの日本人は、海外での喧噪を不思議な思いで眺めているに違いない。話題の書とはいえ、たかだか推理小説が、なぜこれほど多くの人々の神経を逆なでているのか、と。

まずは『ダ・ヴィンチ・コード』向けられた論争や批判の一部を見てみよう。ヴァチカン(ローマ・カトリック教会)は、この小説は教会の歴史を著しく歪めていると批判した。小説中、得体の知れない秘密結社として描かれているカトリックの一組織オプス・デイは、映画上映を目前にして、「この映画はフィクションです」という但し書きを付けるよう、製作会社のソニー・ピクチャーズ エンタテインメントに要求した。これに対し、監督のロン・ハワードは「この作品はスパイ・スリラーで但し書きは不要」と反論した。その他、数え切れないほどのプロテスタント福音派のグループが、『ダ・ヴィンチ・コード』はイエスの神聖さを冒涜する現代の「グノーシス主義」(後述)であると批判し、中には映画のボイコット運動を展開している組織もある。

06年初頭、世界中で論争となり、場所によっては死者すら出す暴動を引き起こした預言者ムハンマドの風刺画問題が起こった。この事件に「象徴」されるように、表現の自由と宗教的価値の激突が世界の各地で見られた。そして、『ダ・ヴィンチ・コード』もまた、世界が抱えるこうした問題を「象徴」しているのだ。

『ダ・ヴィンチ・コード』の冒頭、登場人物の一人ロバート・ラングドンは「宗教象徴学者」として紹介されている。「象徴」解釈を使って、様々な事物に隠された秘密を次々と明かしていくところに、この小説の醍醐味の一つがある。そして同時に、『ダ・ヴィンチ・コード』という小説とそれが引き起こした論争を、現代世界の深層を読み解く「象徴」として理解することもできるのだ。『ダ・ヴィンチ・コード』騒動から、どのような世界が見えるだろうか。

映画に映し出された救済のスタイル

宗教に通じていない人であっても、『ダ・ヴィンチ・コード』がキリスト教世界に波紋を投げかけていることは容易に察することができる。その点、クリスチャン人口の少ない日本では、欧米と同様の火種を抱え込むことはない。ところが、日本でも意外と身近なところに『ダ・ヴィンチ・コード』に通ずる問題意識が存在している。一つは、救済とは何か、ということである。

たとえば「風の谷のナウシカ」(84)、『新世紀エヴァンゲリオン』(95～96)、「GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊」(95)といった、よく知られたアニメを思い浮かべてみよう。終末的世界における救済者伝説を体現するナウシカ。使徒との接触によって加速される人類補完計画。現実世界を捨てるかのように電脳世界の一部と融合していった草薙素子。一見、何の関連もなさそうであるが、実はこうした救済論的なストーリーは、すべて『ダ・ヴィンチ・コード』の素材となっているグノーシス主義と強い相関関係を持っている。SFアニメは、私たちが潜在的に持っている世界観やあるべき世界像を映し出すことがある。SFアニメを通じて紡ぎ出されてきた日本人の世界観や歴史観が、期せずして「ダ・ヴィンチ・コード」のそれとバックグラウンドで共振しているとすれば、それもまたグローバル化時代の産物であると言えよう。

グノーシス主義とは何か

では、そもそもグノーシス主義とは何なのか。『ダ・ヴィンチ・コード』において重要

な謎を読み解く鍵の一つに、グノーシス文書『ピリポによる福音書』がある。宗教史学者ティービングは「ピリポによる福音書から始めるのが一番だ」(単行本下巻16頁)と語り、その一節をソフィーに読み上げさせる。そして、ラングドンとともに説明を加える。つまり、イエスがマグダラのマリアと恋愛関係・婚姻関係を持っていたと言うのだ。この事実がカトリック教会によって歪曲される一方、シオン修道会によって秘密裏に保持されてきたと話は展開していく。『ダ・ヴィンチ・コード』全体にわたって、強烈なカトリック批判があるので、それに対しカトリック教会や、目的のためには殺人すら辞さない秘密結社として描かれているオプス・デイが、この作品に対し文句を言いたくなるのは、よくわかる。しかし、名誉毀損が批判の中心ではない。イエスが婚姻関係を持ち、子ども(娘)までもうけていたというダン・ブラウンの主張が、イエスの神聖さを冒涜する行為として、保守派のキリスト教徒の怒りを買ったのである。

それゆえ、『ダ・ヴィンチ・コード』の批判者の多くは、ダン・ブラウンの『ピリポによる福音書』解釈は荒唐無稽であると非難する。それらの批判には学問的に見て妥当なものと、感情的な反発とが混在しているが、ここでは『ピリポによる福音書』の細部に立ち入らず、むしろ、それが前提としているグノーシス主義について説明しよう。

グノーシスとは「知識」や「認識」を意味

隠し味として仕込まれたグノーシス的素材が、日本のサブカルチャー(SFアニメなど)と高い親和性があったことも見逃すことはできない

するギリシア語であるが、グノーシス主義は初期キリスト教の正統主義の立場からは「異端」のレッテルを貼られた宗教思想(運動)であった。その最大の特徴は、二元論的な世界観・人間観である。すなわち、物質的な世界や肉体を拒否し、霊的・超越的な世界や神的本質への回帰を求めるのである。言い換えれば、現実世界に対する徹底した違和感と超越的自己の希求にグノーシス主義の救済原理が隠されている。また、その救済を「認識」させる啓示者(救済者)が重要な役割を果たしている。ここで先にあげた日本のSFアニメの例を思い出して欲しい。現実の世界と来るべき(理想)世界の間で呻吟する主人公たちの声が聞こえないだろうか。グノーシス主義の残響は、現代日本においても「認識」できるように思う。

キリスト教、いやそもそも宗教に対する意識の高くない日本において、どっぷりと宗教的メッセージにつかった『ダ・ヴィンチ・コード』のような作品がベストセラーとなった原因は何であろうか。あたかも映画化されることを前提にして描かれたような、スリリングかつスピーディーな推理展開が、その第一の原因にあるに違いない。しかし同時に、隠し味として仕込まれたグノーシス的素材が、日本のサブカルチャー(SFアニメなど)と高い親和性があったことも見逃すことはできない。両者には、ありきたりの日常や既存のものの考え方を根底から揺さぶるような、新たな真理の「認識」がテーマとして存在している。現代社会は先が見えないのではない。むしろ先が見えすぎるからこそ、その「透明度」に現代人は不安を感じ、また、

いらだつのである。だからこそ、まるで煙幕を巻くかのように現実認識を攪乱し、その向こう側にある超越的世界をかいま見せてくれる物語に魅了されるのであろう。いにしえのグノーシスが現代の日本社会に受胎しているのは偶然ではない。

肉体性と女性性の復権

グノーシス主義の影響を受けた文書は多岐にわたるが(ちなみに、ユダの裏切りがイエスの救済を完成させたという目下、世界中で話題の『ユダの福音書』もグノーシス文書である)、『ピリポによる福音書』をはじめ『(マグダラの)マリアの福音書』『トマスによる福音書』において、マグダラのマリアは最高の位置を与えられている。ダン・ブラウンは、このグノーシス的メッセージを実に巧みに用いたと言える。この素材がさらに一ひねりされ、どのようにして現代的メッセージに転化されているのかを見てみよう。

グノーシス主義は肉体を蔑視する。そして当時、女性は肉体の象徴とされていた。しかし、『ダ・ヴィンチ・コード』はそのグノーシス的素材を物語の各所に使いながら、結果として、肉体性(たとえば、イエスの血筋)と女性性(マグダラのマリアに象徴される女神崇拝)の復権(救済)を逆説的に暗示しているのである。それに対し、グノーシス主義と敵対した教会は、皮肉にも、後の時代においてグノーシス主義に近い「霊魂の救済」を説くようになる。その意味でも、『ダ・ヴィンチ・コード』は、カトリックにおける救済思想の変化(ダン・ブラウンにとっては、ねつ造・堕落)に対する強烈なアンチテーゼを打ち出していると言えるだろう。この点に関しては、女性性の正当な評価や再解釈を求める「フェミニスト神学」の興隆とも共鳴する部分がある。

ある意味、反グノーシス的とも言える結論(肉体性と女性性へのこだわり)を引き立てるための隠し味としてグノーシス主義的素材が用いられていることを考慮するなら、ダン・ブラウンを単純に現代のグノーシス主義者と呼ぶことはできないだろう。ただし、正統主義を自認する人々にとっては「グノーシス主義」は、いつの時代も「異端」の象徴であるから、彼らが敵対する対象に対し、その名を与えようとするのは、やむを得ないことであるとも言える。

現代のイエス・ブーム

『ダ・ヴィンチ・コード』を批判する論者は、感心するほど細かく事実関係を問いただそうとしている。ダン・ブラウンが冒頭で「この小説における芸術作品、建築物、文書、秘密儀式に関する記述は、すべて事実に基づいている」と記していることが、反対派の闘争心を駆り立てる一因になっており、シオン修道会、テンプル騎士団、オプス・デイなどについての記述の真偽がしばしば問われている。しかし、この作品をめぐる論争において、批判者たちをもっとも怒らせているのは、何と言っても、イエスに関わる部分である。イエスの婚姻関係についてはすでに触れたが、その他、「人間」として見なされていたイエスが、コンスタンティヌス大帝によって『神の子』の地位に格上げされた、という記述もある。それに対し、イエスの神聖さを冒涜している、という批判がなされるのである。

『ダ・ヴィンチ・コード』が提起しているイエス理解は、通説に収まらない大胆さを含んでいる。この点が保守派層に批判されながらも、同時に一般大衆を魅了しているわけであるが、これには前史がある。90年初め頃から、アメリカを中心に「イエスとは、どのような人物であったのか」を問うイエス研究が、学問世界での大きな進展を示しただけでなく、大衆的な関心を引くようになった。『タイム』や『ニューズウィーク』などの雑誌も、頻繁にこのテーマを取り上げ、こうした一連の関心の盛り上がりは「イエス・ルネッサンス」と呼ばれるほどになった(映画「最後の誘惑」(88)、「パッション」(04))なども、その一部と言えるかもしれない)。実際、従来の文献学的な聖書学だけでなく、人類学や考古学の新たな知見を加えた総合的なイエス研究が示したイエス像は斬新であった。そして不思議に聞こえるかもしれないが、ある意味、人類は1500年前より、いっそう正確なイエス像を手にしているとすら言えるのである。新たな研究成果が斬新なイエス理解を欲する市場を生み出してきた。そして『ダ・ヴィンチ・コード』は学問的な正確さはさておき、少なくとも、このような流れの中にある大衆的ニーズに実にうまく応えたと言えるだろう。

こはら・かつひろ　1965年生まれ、大阪府出身。同志社大学神学部教授。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。同学で教鞭を取る傍ら、キリスト教思想、比較宗教倫理学を専門に研究。著書には『キリスト教と現代―終末思想の歴史的展開』(共著、世界思想社)、『神のドラマトゥルギー――自然・宗教・歴史・身体を舞台として』(教文館)、『よくわかるキリスト教@インターネット』(共著、教文館)などがある。

『ダ・ヴィンチ・コード』は大衆的ニーズに実にうまく応えたと言える